

弔 辞

國學院大学教授 藺 田 稔

柳川啓一先生、今日は國學院大學の平成二年度入学式でありました。私は、先生の葬儀告別式を前にして大学新入生二千人に對し、先生に對する深い深い学恩を嘯みしめつつ、一時間ほどの講演をして参りました。

今は先生のご靈前に立って國學院大學を代表し、また併せて先生の多くの門下生に代り、慎んで心からの誄びの言葉を述べさせていただきます。

先生は東京大学文学部教授として数々のご要職と幅広い学界活動とをなされていた昭和五十年から既に國學院大學の非常勤講師をもお引受下さり、同五十一年度からは本大学院の講師として毎年、本学の学生に對しても宗教学の深いご学識を与えて下さいました。

その間、東大での宗教学宗教史学科主任教授として学内のさまざまなご役職はもとよりのこと、大阪大学、京都大学、九州大学、放送大学、その他私立大学及び各大学院の講師を勤められ、又日

本宗教学会々長にも推されるなど、まさに超人的なご活躍の合い間にも、そのご薫陶の一端を本学にも注いで下さったのであります。

その後、昭和六十一年三月ご同僚学生たちに惜しまれつつも目出たく東京大学を停年退官され、東大名誉教授の称号をも受けられましたが、私ども國學院大學文学部神道学科のスタッフは、かねて先生の深い学識と何よりもそのご人徳と見識を心から囑望しておりましたので、直ちに本学の専任教授にお迎えできたことは真に幸いでありました。

当時わが神道学科は平井直房教授を中心に旧体制を改め時代に対応すべく学科を拡充する新生の意気に燃えておりましたので、先生のような広いご業績とご見識の持ち主をスタッフに迎えることができたことはまさに百万の味方を得た思いでございました。現に私などは学内の他学部他学科の同僚たちから近來のヒット人事だと随分祝福され

たものでございました。爾来本学文学部神道学科教授として先生はつい平成元年度一杯まで丸四年のあいだ果たして私ども期待以上の活躍ご貢献を賜りました。

私ども門下生には周知のことでありましたが、本学に來られてからの先生のご奉職振りは以前と少しも変わらず真に誠実なものでございました。わが神道学科は神道学と宗教学との両領域を抱えておりますために少数の専任教員を以てしかも昼夜二部に亙る全学学生の一般教育や学科学生の専門教育にあたり、そのみならず神職養成機関として学期中はもとより休暇中にも養成講習の講師を勤めねばなりません。先生にはかって大病をされたお身体を顧みず若い同僚と共にあるいはそれ以上に学内の諸任務を忠実に果たされこの激戦に耐えて來られたことは私どもスタッフが等しく感銘を受けたことでございました。

とりわけ私どもが及び難きことと感嘆しておりましたことは先生の学生たちに対するあくまで誠実で暖いご指導振りでございました。マスプロ教育の現状で兎角おろそかになり勝ちな学生たちとの親密な交流と指導を、先生は誰にも強いることなくご自身で黙々と実践されました。そのご態度にはさすがに今時の学生たちにも心に訴えるものがあり、中味の濃いご講義にもまして個人的にも先生のご薫陶を望む学生たちが集り学部にも大学院にも先生を囲んでの私設の柳川ゼミを誕生させておりました。本日のご葬儀にもそうした先生をお慕いする学生たちが馳せ参じて参列しお手伝いをしているのであります。私ども大学スタッフはこうした先生のこの上ないご努力とご貢献を顧みるとき今更ながら先生を本学にお迎えしたことが或いは先生の天寿を縮めてしまう結果となったのではと悔やむことしきりでございます。

先生もよくご承知のように國學院大學も時代の要請に応じてようやく学内改革が動き始めわが神道学科も更に開かれた体制を執りつつあります。それだけに先生にはこれからもずっとお元気で私どものご指導のために生きていただきたかった。

しかしほんとうに残念ながら先生は既に幽冥境を越えて私どもの近づき得ぬ世界に赴かれてしまわれました。

今はもうこれ以上先生の御心痛を患わすことはありません。どうか安らかにお眠り下さって今はようやく得られたほんとうのご休息にお入り下さい。

さて忘れもしない去る昨年十二月九日大学での神道宗教学会学術大会の当日懇親会の直後お倒れになって以来一進一退の斗病を続けられる先生をお見舞いに何度も病院へ通いながら私はその度毎に先生からの言葉に尽せぬご高恩を今更ながら嘯みしめて参りました。この私の想いは数多くの先生の門下生である私の友人後輩たちが等しく共にするものと確信しております。

私どもが東京大学において先生にご指導を賜りましたのは、昭和三十年代から五十年代までその間いわゆる六十年安保、七十年安保改定や大学紛争を中心に激しい社会と学園の動揺の時代でもありました。

先生は何時いかなる時でもまず第一に学生の身を案じられ私どもが当時の女子学生樺美智子さんの死をきっかけに学部大学院学生ぐるみで国会議事堂に向いました時も先生は唯一人我々と行動を共にしていただいたほどでありました。

しかしこの安保斗争の大衆行動が先生の代表的研究の一つ、祭りをテーマとするきっかけでもありました。

その後の東大紛争に際しても、先生は真正面から紛争処理に当たり、あるいは学生部委員としてそれこそ骨身を削るご努力の様子にはすでに学外にあった当時の私どもは先生なればこそと敬服しながらも秘かに先生の身を案じる毎日でありました。

果たして若者を教育する立場として当然のことながら、先生は常に時代の先端を行く若者文化に敏感に対応され、しかも世代毎の若者の思想的学問的な悩みに何時も適切な方法を示唆して下さったのであります。若者は大人のごまかしには敏感であります。先生は私ども当初の門下生から現在の國學院学生に至るまで終始一貫何ごとについてもごまかしや嘘をつかれることは決してなかった。そのあくまで誠実なお人柄が私ども門下生をして先生の鋭い分析研究以上に我々を魅きつけたものであります。

それにしても先生は余りにもご自身を顧みなさらなかった。いつも他人のため学生のために心を砕き労を執られて余りにもご自分の心身を痛みつけられ過ぎたとの思いがしきりであります。先生のご学問は、かつての伊藤整の文学者論をもってすれば認識者型の学問ではなく求道者型のそれでありともすれば破滅型にもなりかねない求道者の学問でありました。けっして一時の体系化に安んじることなく築いては壊し先に進まんとするいわば旅人の学問であったのかも知れません。

今振り返りますと数年前に大病をなさってから先生の恩師岸本英夫先生に倣われてか生死論をテーマに据えられ現代に揺れ動く日本の祖先崇拝を凝視されるようになられさらには國學院大学で神社神道に親しまれたことで、私などは先生がようやくその旅心を休めていただけるかと秘かに期待しておりました。ところがそれを期待する間もなく先生はまた今度は遥かな旅に立たれてしまいました。

それにつけても思い起しますのは、今を去る二十六年前の昭和三十九年の早春に、先生と私ども共通の恩師でありました故岸本英夫先生の東京大学図書館葬に際し、先生はやはり門下生を代表して弔辞を読まれました。その折り先生は岸本先生が晩年に残された“大いなる別れ”という生死観を踏まえられ、生前岸本先生が力を注がれた「山の宗教」の調査研究に言及されて、亡くなった岸本先生が後を振り返り振り返りして手を振り別れ

を告げながら木立ちの深い靈山に入山されるイメージを語られたことを今でも鮮明に想い起します。

柳川先生もまた山村の御魂祭りにはかつて熱心な研究に取組まれたことがあります。あるいは先生も亡き岸本先生の行かれた跡を追うようにしてあの青垣なす山中に赴かれたのかも知れません。

今年は例年になく桜の花が咲き急ぎすでに散り初めております。古人は梅の花の早く散ることを不吉に思い、この季節に鎮花祭を行ったものであります。

しかし私どもが花を鎮める間もなく、先生は去る四月三日早朝に旅立たれました。

四月三日は先生と奥さまの大事な結婚記念日であります。あるいは先生の奥さまへの深い想いが、この四月三日を選ばれたのかも知れません。

思えば、先生の長い斗病にお子さん方、——ご長女久見子さん、ご長男英巳君、ご次男三季夫君はもとよりのこと、とりわけ奥さま淑子さまのご看病ぶりは、ご自身の病軀を鞭打ってのことだけに痛々しいばかりのご献身でありました。

先生、どうかこれからはご自分のことだけを考えられ、その愛情をご家族に注がれて、今後末永く奥さまやお子さま、お孫さまを暖かくお守り下さいますよう最後に心からお祈り申し上げまして、ここに國學院大學を代表し、併せて先生の門下生一同を代表しての誄びの言葉といたします。

平成二年庚午四月五日